

## 個人空間におけるネットワークの考察

田 島 弘 司\*

(平成10年10月30日受理)

### 要 旨

本稿は、筆者が携わった「日本語教育におけるネットワークに関する調査研究活動」から得られた知見を整理しまとめたものである。まず、個人空間の分析を行い、個人空間を構成する3種類の空間を提示した。次に、それぞれの空間に対応するネットワークモデルを示し、最後に、今後の研究の方向付けを行った。

### KEY WORDS

個人空間モデル	personal space model	ネットワーク・モデル	network model
他者管理空間	managed space	タテ型ネットワーク	vertical network
自律共生空間	convivial space	ヨコ型ネットワーク	horizontal network
自己管理空間	self-managed space	リゾーム型ネットワーク	rhizome network

### 1 は じ め に

近年、インターネットに代表されるネットワーク関係の情報機器の発展・普及に伴って、ネットワークへの関心が高まり、様々な分野においてネットワークに関する研究が進みつつある。筆者の専門領域である日本語教育においても、インターネットや衛星通信などの情報機器を利用した教育におけるネットワークの研究が進められている。また、それ以外にもネットワークに関する研究はいくつか存在しており、その中の一つに、学習者及び教授者（教師以外の支援者を含む）のネットワーク形成に関する研究がある。そこでは、ネットワークを人間行動における中心的な条件の一つと考え、複数の人間の接触によって形成されるネットワークについてケース・スタディーによる調査を行っている。筆者は、(社)日本語教育学会のネットワーク調査研究委員会に所属し、約4年半にわたり上記研究に携わってきたが、これまでにネットワークに関する何らかの知見を自分なりに得ていると考えた。小論は、それを整理し明確にすることを目的としている。

なお、考察は、個人が人や自然や物に対して持つ種々の関係の総体としての空間(個人空間)に範囲を限定して行われている。また、考察の手順としては、まず、事例の分析を元にして考案した3種類の空間によって構成される個人空間モデルを提示する。次に、個人空間モデルのそれぞれの空間に対応する3種類のネットワークを考案し関連付けを行うことによって、個人

---

\* 言語系教育講座

空間におけるネットワーク・モデルを提示し、最後に、まとめと研究の方向付けを行う。

## 2 人の生きる空間（個人空間）のモデル

1996年に行政改革委員会が提出した「規制緩和の推進に関する意見（第2次）」の中で、学校教育の現状について、

現在の教育制度は平均的な教育水準の向上と効率性の確保に力を発揮してきたが、学校は一般的に画一的、硬直的、閉鎖的な状況にあり、（中略）現在の状況が、多様化している子供に選択肢を与えず、その結果閉塞感を生み、不登校やいじめなどの現象が生じる。（下線は筆者）

と述べられている。下線部の「閉塞感」を「閉ざされ塞がれた感覚」と言い換えれば、個人を閉じ込め圧迫する空間として学校をとらえていることが分かる。

また、「閉塞感」を「自分の居場所のなさから生まれる感覚」と解釈すれば、自分の「居場所」がなくて苦しんでいる子供が増えているとも考えられる。萩原健太郎は「子どもの居場所(Children Sense of Position)」<sup>1)</sup>の中で、

子どもの生きる空間から、空き地や原っぱ、路地裏といった曖昧な意味空間が喪失し、学校や自分の家、公園、コンビニといった大人の目の行き届いた空間へと変容してきている。

そこには子どもが能動的に空間をつくりかえていく「隙間」がほとんどないのである。

と述べている。また、同じ文章の中で、萩原は「居場所」を「自己と他者・事物・自然との相互的な関係性が保障されてこそ生み出されるもの（前掲）」と考え、最後に「子どもの居場所は、大人の居場所不在の問題でもある（前掲）」と結んでいる。

ここで、萩原の文章を、子供を取り巻いている「空間」、という視点によってとらえ直すために、「大人の目の行き届いた空間」を「他者管理空間」<sup>2)</sup>、「居場所」を「自律共生空間」と言い換えてみる。

前者の「他者管理空間」の意味については「読んで字のごとく」であり、容易に理解することができると思われる。ただし、管理する「大人」を、事物、自然を含む「他者」に置きかえることによって、自己以外のすべての存在によって管理される「空間」を意味するものにした。ここで、人間以外の事物や自然によって自己が管理されることがありうるのか、という質問を想定して、次のような回答を用意した。すなわち、「管理されている」と感じるのは「自己」であるので、例えば、「自己」が「学校に縛られている」とか「職場に長時間拘束されている」と感じるとすれば、たとえそれを使って管理しているのが人間であるとしても、「学校」や「職場」を「自分を管理する空間」つまり「他者管理空間」と考えてよい、ということである。

後者の「自律共生空間」については、まず「居場所」を「自己と他者・事物・自然との相互的な関係性が保障された空間」と定義し、次に「空間」を形成する部分、すなわち「自己と他者・事物・自然との相互的な関係性が保障された」の意味に最も近い言葉として「人と人との間、人と環境・道具との間の、自律的で創造的なかわりあい」を意味する「自律共生(conviviality)」<sup>3)</sup>を探し出し、それに「空間」を加え「自律共生空間」とした。

「居場所」を更に細かく分析すると、「居場所」には上記の「自律共生空間」以外にも、「他者・事物・自然」（以下「他者」とする。）との「相互的な関係」<sup>4)</sup>がほとんどなくてもよい、あ

るいは「他者」との関係を回避できる、言わば最終的な「逃げ場」としての「空間」が存在することが考えられる。それを「自己」のみによって「管理」される「空間」と考え「自己管理空間」<sup>5)</sup>とした。具体的には、子供の肉体と精神が統合された空間を意味し、より具体的には「子供そのものの空間」を指すと考えられる。

以上のほかにも、理論的には、誰にも管理されない「空間」、すなわち「非管理空間」がある。例えば、萩原の言う「空き地や原っぱ、路地裏といった曖昧な意味空間」などは、一見「非管理空間」のように思える。しかし、実際には、「曖昧な意味空間」は「自律共生空間」の性質の一部を表したものであると考えられる。なぜなら、「自律共生空間」では、「他者」との「相互的な関係」が維持されるため、一方的で固定的な関係が回避され、「意味」の固定化が起こらず、「曖昧さ」を残すことができるからである。もう少し分かりやすく言えば、「曖昧な意味空間」である「空き地や原っぱ、路地裏」に「居場所」を見出す「子供」は、事物や自然と「自律共生」していると言えるからである。「非管理空間」<sup>6)</sup>は物理的には存在可能な「空間」ではあるが、「子供」と何らかのかかわり持つ「空間」ではないので、ここでは取り上げないことにする。

なお、「自律共生空間」には、「管理 (management)」という言葉が含まれていないが、「自律共生」も「管理」形式の一つであると考えられる。なぜなら、「子供」が「他者」と「自律共生」の関性を持つ場合にも、その関係を維持または発展させるために、両者の間に何らかの「調整 (adjustment)」が必要であり、それが「管理」の一種であると考えられるからである。

以上述べた三つの空間（非管理空間を除く）の構成を示せば、図1のようになる。

空間の構成を簡単に説明すると、子供を取り囲む「他者管理空間」の中に「自律共生空間」があり、その中に「自己管理空間」が存在する。

次に、それぞれの空間が形成される順序について、人の誕生とその後の成長過程から考察する。まず「他者管理空間」に人が誕生し、そこから人と「他者」との「インターアクション (interaction)」<sup>7)</sup>によって「相互的な関係」が発生し「自律共生空間」が形成され、最後に、「自我」<sup>8)</sup>の芽生えによって「自己管理空間」が形作られていくと考えられる。「自己管理空間」を「子供」そのものととらえた場合、「子供」が存在しているにもかかわらず「自己管理空間」が存在しないことになってしまうが、これは「自我」の芽生え以前の「子供」には、「自己管理」

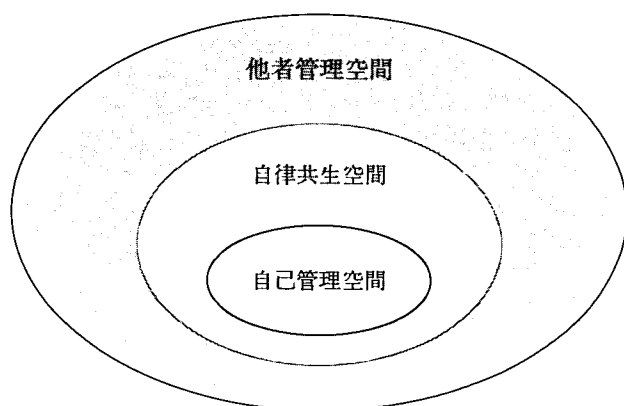


図1 子供の生きる空間の構成（個人空間モデル）

がありえず、よって「自己が管理する空間」となりえないからである。

上記の仮説について、社会心理学的な視点から検討してみる。まず、誕生時（新生児期）についてであるが、S.A. マレル（Stanley A. Murrell）は、『コミュニティ心理学（Community Psychology and Social Systems）』の中で、「幼児は出生すると同時に、諸々の社会的システムの、複雑なネットワークの非自発的な一成員である」<sup>9)</sup>と述べている。「非自発的な一成員」が生きる空間とは、正に「他者管理空間」であろう。次に、「自律共生空間」の形成についてであるが、『コミュニティ心理学』の中の「最初の1, 2年」<sup>10)</sup>の項において、マレルは次のように述べている。

幼児の直面する初めての問題領域は、生存のそれである。彼の経験のなかでは、この問題はおそらく、「非常に気分が良い」か、あるいは「非常に気分が悪い」というような、二分法のかたちをとるであろう。人間の幼児は生存のために他の人間たちに依存しなければならないから、彼の生存の問題は、非常に早くから親和の問題にもなってくる。（中略）生存に対する初期の問題処理の方略は、親和の問題に対する方略と連結されたものになるであろう。ここに述べられている「親和の問題」が、すなわち「自律共生」のことであると考えられる。よって、幼児は他者とのインターアクションによって親和的な関係を築き「自律共生空間」を形成すると考える。最後の「自己管理空間」の形成は、前述のとおり「自我」の形成とのかかわりが大きい。G.H. ミード（George Herbert Mead）は、『精神・自我・社会（Mind, Self, and Society）』の中で、「自我は、〔人間が〕誕生したとたんにすでにあるものではなく、社会的経験や活動の過程で生じるもの、すなわちその過程の全体およびその過程にふくまれている他の個人たちとの関係形成の結果としてある個人のなかで発達するものである。」<sup>11)</sup>と述べている。このことから「自我」の形成が「他の個人たちとの関係形成」の後になされるものであることが分かる。よって、「自己管理空間」は「自律共生空間」よりも遅く形成されると考えられる。また、マルスは、生後1, 2年の幼児の発達について、「彼は家族のシステム内で、個性化された一つの社会的同一性を持つようになり、この特殊な同一性は、彼の問題処理の試みに対して示される諸反応に、ますます影響を及ぼすようになる。」<sup>12)</sup>と述べているが、「個性化された一つの社会的同一性」を「自我」の芽生えと解釈すれば、生後1, 2年で「自己管理空間」が形成されはじめると考えることも可能である。

以上のように三つの「空間」の形成過程を考えると「子供の生きる空間」の時間的延長線上に「大人の生きる空間」があることが分かる。よって「子供の生きる空間」を「人の生きる空間」として、一般化することが可能である。さらに、「人の生きる空間」の意味を明確化するため「個人空間」と呼ぶことにする。（以下、「子どもの生きる空間」を「個人空間」とし、図1を「個人空間モデル」とする。また「子供そのものの空間」を「人そのものの空間」とする。）

上記の個人空間についての考え方に基づいて、萩原の述べた子供の状況を描き直せば、次のようになろう。現代の日本社会において、子供は、〔他者〕によって一方的に管理され押し付けられる「他者管理空間」の圧迫によって、本来、社会とのインターアクションによって築いていくはずの「自律共生空間」の形成を阻まれ、「自己管理空間」の中に逃避せざるを得ない状況に追い込まれている。また、これは「子どもの居場所は、大人の居場所不在の問題でもある」ことから、大人を含めた日本人の状況としてとらえることも可能であろう。船津衛は、『自我の社会理論』の中で、「自我」が「管理社会」によって圧迫されている状況について「人びとが自我形成のベースを社会的、制度的枠組みのうちに求めると、自我の消滅がひき起こされる。集

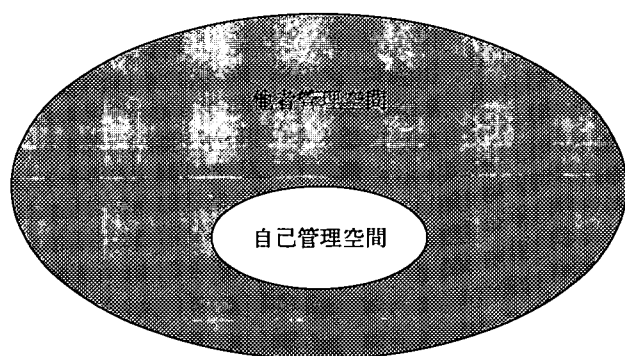


図2 居場所喪失の状況

団や組織の巨大化，官僚制化，そして管理社会の進行は，人間の自我に危機をもたらす。」<sup>13)</sup>と述べている。逆に言えば，「自我形成のベース」を「社会的，制度的枠組み」すなわち「他者管理空間」ではなく「自律共生空間」に求めれば，「自我」は安全である，とも解釈できる。

居場所を失った状況について分かりやすく図で示せば，図2のようになる。

図1と図2を見比べてみると，「自律共生空間」が「他者管理空間」と「自己管理空間」の間で緩衝材的な役割を果たしているように見える。比喩的に「他者管理空間」を固体，「自律共生空間」を空気，「自己管理空間」を人間と考えると，図2の「居場所喪失の状況」において，「人間」は，密着した「固体」によって行動の自由を奪われ閉じ込められて窒息死しそうになっている。一方，図1では「人間」は「固体」との間にある「空気」の中で，範囲の制約はあるが自由に行動し生きていくことができる。以上のように，「自律共生空間」は，制約はあるものの，ある程度の自由を「他者」との関係の中に確保することによって，「他者管理空間」の圧迫を低減する役割を果たしていると推測される。

以上，現代日本社会における閉塞的な状況を分析することによって，まず，三つの「空間」，すなわち「自己管理空間」「自律共生空間」「他者管理空間」によって構成される「個人空間モデル」を提示し，次に，そのモデルを使って閉塞的な状況の原因について考察した。

最後に，冒頭で引用した行政改革委員会の意見を，本章で示した「個人空間モデル」を使用し分析してみる。まず，「学校は一般的に画一的，硬直的，閉鎖的な状況にあり」は，学校における空間が「他者管理空間」であることを意味している。次の「現在の状況が，多様化している子供に選択肢を与えず，その結果閉塞感を生み」は，「子供に選択肢」を与える「自律共生空間」の欠如が，「自己管理空間」に子供を押し込め，「閉塞感」を生んでいる，と解釈できる。最後の「不登校やいじめなどの現象が生じる」は，「自己管理空間」に追い詰められた子供の「閉塞感」がはけ口を求めて不適応行動を起こしていると理解される。

### 3 個人空間を形成するネットワークのモデル

千葉県浦安市の小学5年生を対象に「子どものなわばり (Children Sense of Territory)」についてイメージマップ調査を行った梶島邦江は，次のように述べている。

この時期の子どもたちの身体感覚が、そとに向かって広がっていき、大きく膨らんでいくとするのに対して、むしろ身体に近いところへ近いところへと、意識は押しつぶめられているようにも、また、より広くつながっていきとする子どもたちが、ブツンブツンと切り離され、住まいという狭い空間、一人という狭い世界に押し込められようとしているかのようである。<sup>14)</sup>

これも、前章で述べた「個人空間モデル」を使えば、インターアクションによって「自律共生空間」を広げようとする子供の力が、学校の「他者管理空間」の圧力に負けることで、「自己管理空間」へ追い込まれている状況を述べている、と理解できる。ただし、ここで注目したいのは、「より広くつながっていきとする子どもたちが、ブツンブツンと切り離され」という表現である。この「つながっていきとする」対象は「他者」であり、その行動はインターアクションであるが、その結果形成される関係（つながり）の総体は、一般的にネットワークと呼ばれている。「ブツンブツンと切り離され」るのは、「他者」との関係であり、その結果としてネットワークの分断が生じる。阪神大震災において、道路、線路、ガス管、水道管、電線、電話線など、インフラとしてのネットワークが分断されたことは、記憶に新しい。本章では、前章で提示した「個人空間モデル」の三つの「空間」に対応するネットワーク・モデルについて考える。

## タテ型ネットワーク

### 3. 1. 1 タテ型ネットワークのイメージと特徴

まず、「他者管理空間」にかかわるネットワークについて考える。「他者管理空間」の特徴としては、「他者」からの固定的で一方的な関係を強いられる、という点が挙げられる（註2）参照）。こうした関係を、中根千枝は著書『タテ社会の人間関係』<sup>15)</sup>の中で「タテの関係」と呼んだ。また、逢沢明は著書『ネットワーク思考のすすめ』<sup>16)</sup>の中で、「タテの関係」によって形成されるネットワークを「タテ型ネットワーク」と名付けた（以下「タテ型」とする）。そのイメージを図で表せば、図3のようになる。

ここで、「個人空間」とのかかわりについて、ネットワークを見る場合に注意しなければならないのは、視点が特定の個人にあるということである。つまり、個人がネットワークの中のどこに位置するかで、ネットワークの見え方が全く違ってくるということである。例えば、図3のネットワークの頂点に位置する個人から見た場合、ネットワークは次頁に示す図4のように見えるかもしれない。

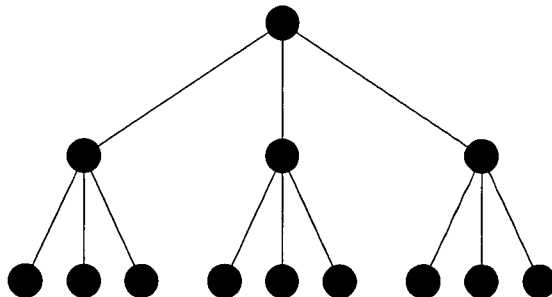


図3 タテ型ネットワークのイメージ<sup>17)</sup>

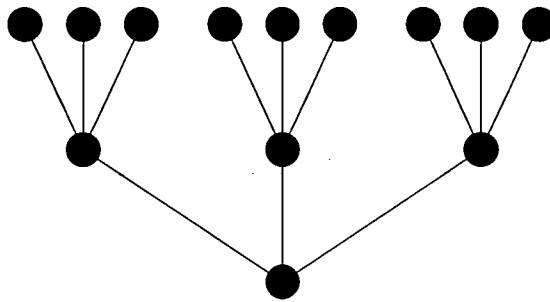


図4 トップから見た場合のネットワーク

また、[他者]との関係によって見れば、管理者と被管理者の関係の連続したつながりの中に個人が埋め込まれていることが分かる。一見、管理者は被管理者に比べ「自己管理空間」や「自律共生空間」が多いように見えるが、必ずしもそうはならない。管理することは、被管理者との関係に縛られる（管理される）ことを意味するため、トップやボトムに比べてつながり（関係）の多い中間管理職の方が、「他者管理空間」が大きいと見ることも可能である。また、[タテ型]には、図3のようなピラミッド型以外にも、1対1の直線型や1対多の逆ピラミッド型もありうる。例としては、1対1では、核家族の中の親子関係、1対多では、多人数によるいじめにおける関係、などが挙げられる。

中根、逢沢の両著（前掲）を参考にして[タテ型]の特徴を抽出すると、以下のようになる。（タテ型ネットワークの特徴）

形態：階層構造

関係：上下、一方向的、固定的、強制的、閉鎖的

### 3. 1. 2 タテ型ネットワークの中身

藤田英典は、「共生空間としての学校」<sup>18)</sup>の中で、人が好むと好まざるとにかかわらず所属せざるを得ない集団（強制集団）について、次のように述べている。

国家、民族、地域社会、子供にとっての家族（定位家族）は、（中略）強制集団の代表的なものであるが、学校もまた、いまや準強制集団になっている。しかし、国家、民族や地域社会は、民主化や国際化や都市化が進むなかで、（中略）その強制力と凝集性は拡散している。

（中略）ところが家族と学校は、日常生活の主要な舞台であり、そこに濃密な人間関係が展開しているだけに、その集団としての有り様は個々人にとって重大である。

「他者管理空間」の重要な[タテ型]として、国家や民族や地域社会があるが、それにも増して重要になってきているのが、家族と学校であることが分かる。藤田は、また『教育改革』<sup>19)</sup>の中で、子供の日常生活が、「規範的な制度的枠組み（学校、家族）（前掲）」と「具体的で干渉的な他者関係（家族関係、仲間関係、教師・生徒関係）（前掲）」との中で展開していると述べている。これは、家族関係、仲間関係、教師・生徒関係など、本来「自律共生空間」の一部となり得る「関係」が、[タテ型]として「他者管理空間」に吸収されてしまうことを示唆するものである。と同時に、[タテ型]になっている、家族関係、仲間関係、教師・生徒関係を、「自律共生空間」を構成する他のタイプのネットワークに変えていくことによって、「他者管理空間」を減少させ、「自律共生空間」を増大させる可能性を示すものでもある。

次に、日本の一般的なサラリーマンの状況についても少し取り上げてみたい。文献としては若干古いが、「国際社会からみた日本の企業と社会」<sup>20)</sup>の中で、楊天滄は、日本の企業の特徴について、次のように述べている。

個人主義が発達せず、集団主義が主軸になっている日本のような社会では、(中略)個人の内面的価値ではなく、集団への貢献度が価値の尺度になっているから、人々は(中略)集団の目標の達成に向かって忠誠競争を行う。こうして人々はますます組織へのめり込み、企業と一体化し、企業の中に擬似コミュニティが形成される。

いわゆる「会社人間」が日本の企業を支えていることが述べられている。集団の目標に向かって一致団結する人々の関係が「タテ型」を形成するであろう、ということは容易に理解できる。一方、高度経済成長期の企業では「擬似コミュニティ」において、人々は「自律共生空間」を形成していたと考えられるが、長引く不況の中でリストラの進む現状においては、「擬似コミュニティ」の形骸化あるいは崩壊が進行し、企業内における「居場所」すなわち「自律共生空間」は減少の一途をたどっていると考えられる。「会社人間」は、これまで会社以外には、地域社会はもとより、極端な場合、家族の中にも自分の「居場所」を作る努力をあまりしてこなかった。以上は、第2章の引用の中にあった「子どもの居場所は、大人の居場所不在の問題でもある」ことの理由説明となろう。

### 3. 2 ヨコ型ネットワーク

#### 3. 2. 1 ヨコ型ネットワークのイメージと特徴

逢沢(前掲)が「厳密に言えば、ネットワークにもタテ型とヨコ型があるのだが、一般的にはネットワーク社会=ヨコ社会とみなされることが多く」と述べているように、ネットワークと言え、図5のような「ヨコ型ネットワーク」(以下[ヨコ型]とする)を想定するケースが多い。

図5は、[ヨコ型]の典型的なイメージではあるが、他にも直線状に横につながったもの、外側の輪だけで中のつながりのないもの、外側の輪がなくてランダムにつながったもの、など様々な形がありうる。ただし、[タテ型]では、図3を図4のように回転させた場合、関係が全く違って見えたが、[ヨコ型]では、回転しても関係に変化が現われてこない。これは、ネットワーク上の[他者]との関係が上下ではなく、水平(対等)であることに起因する。対等な関係を維持するためには、トップダウンの一方的な関係ではなく、双方向の関係が必要である。また、

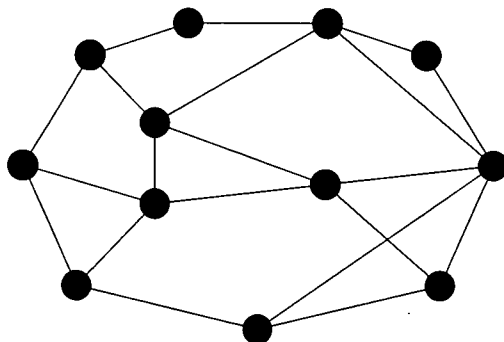


図5 ヨコ型ネットワークのイメージ<sup>21)</sup>

つながりを持つことによって一時的に何らかの役割を引き受けることになる場合があるが、それを固定化しないために、関係を流動化することが重要である。具体例を挙げれば、自分が分からないことを他者に教えてもらうときに、教える者と教えられる者という役割が生じるが、次に、他者の求めに応じて何かを教えるときには、役割が逆転する。そのほか、[タテ型]においては、個人は特定の位置に強制的（あるいは半強制的）に埋め込まれてしまうが、[ヨコ型]においては、個人は参加・不参加の自由を保障され自律的にかかわることができる。そのため、他者の出入りを制限しないよう開放的であることが求められる。ただし、実際には、ネットワークをオープンにしすぎると、リスクが増大することが多いため、参加資格等に制限を設けているケースが多い。ネットワークの閉鎖性は、[タテ型]の特徴である。よって、現実の[ヨコ型]には、[タテ型]の要素（上下、一方的、固定的、強制的、閉鎖的）が含まれている可能性があると考えられる。逆に、現実の[タテ型]にも[ヨコ型]の要素を含んでいる可能性があると言える。

以上述べた[ヨコ型]の特徴をまとめると次のようになる。

（ヨコ型ネットワークの特徴）

形態：水平構造

関係：対等、双方向的、流動的、自律的、開放的

### 3. 2. 2 ヨコ型ネットワークの中身

今から28年前の1970年に『脱学校の社会（Deschooling Society）』を書いたイヴァン・イリイチは、「序」の中で、次のように述べている。

生徒に教育内容を効果的に「注入する」ための新しい学校形態を模索している現在の傾向は、むしろその逆そのものを模索するように逆転させなければならない。つまり個々人にとって人生の各瞬間を、学習し、知識・技能・経験をわかち合い、世話をし合う瞬間に変える可能性を高めるような教育の「ネットワーク」をこそ求めるべきなのである。<sup>22)</sup>

イリイチは、子供を「技能や価値のあるものの模範として役立つ人々に取り囲まれながら事物の世界の中で成長する」<sup>23)</sup>ものと考え、そのための手段としてネットワークを考えた。注目すべきは、「ネットワーク」と訳されている部分の原文の英語が“web”（くもの巣）となっている点である。図5の[ヨコ型]は、正に「くもの巣」の形をしている。また、古瀬幸広・廣瀬克哉<sup>24)</sup>によれば、イリイチの教育思想は、現在のインターネット思想のバックボーンとなり、「ウェブ（ホームページ）」のネーミングにも影響を及ぼしている。インターネットと言えば、情報ネットワークの最先端技術というイメージが強いが、[ヨコ型]を利用した教育・学習手段としての機能を持つことが分かる。イリイチの教育思想は、これまでも日本の教育に多大な影響を及ぼしたと考えられるが、今後は更に影響力を拡大すると考えられる。なぜなら、中央教育審議会によって1996年に提出された「第一次答申の骨子」の中で述べられている「『生きる力』の育成を基本とし、知識を教え込むことになりがちであった教育から、自ら学び、自ら考える教育への転換を目指す。」は、28年前にイリイチが考えたことと基本的に変わらないからである。

次に、イリイチの考えるネットワークと「自律共生空間」[ヨコ型]の関係について考察する。先の引用の中にある「個々人にとって人生の各瞬間を、学習し、知識・技能・経験をわかち合い、世話をし合う瞬間に変える」は、言葉を変えれば、個人の周りにいる[他者]を学習のための様々な資源（リソース）としてとらえ直すということであろう。これは、近年、小中学校

で行われ始めた、地域に住む知識・技能・経験を持った人々を訪ね、話を聞いたり体験学習したりする活動などの中で一部実現されていると言える。しかし、その質、量、ともに十分であるとは言い難い。そもそも、28年前にイリイチが提唱した「脱学校の社会」も、未だほとんど実現していないのが現状であるから無理もない話ではあるが、今後教育改革を進める上で、大きな障害になると予想されるのは、教師と子供の関係である。高橋勝は、教師と子供の関係について『子どもの自己形成空間』の中で次のように述べている。

近代学校は産業社会の発展の過程で産み出されてきたものであるために、子どもの未来を、この社会的枠組みの中で固定的に先取りし、それへの準備のために教育を行うという制約をもたざるをえなかった。(中略)ここでは、子どもは、つねに啓蒙の対象、客体であって、教える者(教師)と教えられる者(子ども)は、明確に区別されている。(中略)子どもは、学校という制度のなかでは、知識を与えられ、社会化される対象であって、相互に学びあい、社会規範を吟味しようという自由の余地はほとんど残されていないかのようにみえる。<sup>25)</sup>「教える者(教師)と教えられる者(子ども)は、明確に区別されている。」ということは、役割の固定化を意味している。よって、そのネットワークは「タテ型」にならざるを得ない。インターネットによって、他者と、対等で、双方向的、流動的、自律的、開放的な関係を結び、ヨコ型ネットワークを形成することで拡大していく「自律共生空間」は、「教える者」でありつづけようとする「教師」によって形成される「他者管理空間」によって、圧迫されつづけるのであろうか。

### 3. 3 リゾーム型ネットワーク

#### 3. 3. 1 リゾーム型ネットワークのイメージと特徴

第2章では、「自己管理空間」を「人そのものの空間」と考えた。また、「空間」の「自己管理」が「自我」の存在を前提としたものであることも述べた。よって、「人の生きる空間」が「個人空間」であり、その中で「人」そのものが形成する空間が「自己管理空間」であることから、「自己管理空間」は「人」の存在形態の側面を示すものであり、それが「自我」と深くかわるものであることが分かる。船津衛は、「自我」について次のように述べている。

自我は他者の期待をそのまま受け入れた「客我」の側面とその客我に対する反応である「自我」の側面から成り立っている。そして、自我は客我に対して働きかけ、変容させ、また新たなものを生み出す自我の積極性を表わし、人間の自由や自発性のセンスをもたらすものである。<sup>26)</sup>

また、観点は違うが、カール・ロジャーズ(Carl Rogers)は「個人は自己の内部に自己理解や自己概念、基本的態度、自発的行動を変化させていく為の大きな資源を内在させている。」<sup>27)</sup>と述べている。ここでの「自己」は、船津の「自我」とほぼ同義であると考えられる。船津、ロジャーズが示す「自我」(または「自己」)の特徴は、「自らが自らの力で自らを変化させる」性質、言わば「自己変革性」であろう。こうした「自己変革性」を持つ自律的なシステムは、通常「自己組織系(self-organizing system)」と呼ばれている。今田高俊は「自己組織系」について次のように述べている。

自己組織系とは、一定の環境のもとで、みずからのメカニズムに依拠して自己の構造を変化させ、新たな秩序を形成するシステムのことをいう。環境からの働きかけがない場合でも、みずからを変化させる能力を持つことを原則とする、自律的なシステムのことである。<sup>28)</sup>

自己完結的な要素のある「自我」にとって「環境からの働きかけがない場合でも、みずからを変化させる能力を持つ」ことは特に重要であると考ええる。「自我」が「自己組織系」であれば、「自我」を持った自律的な生命体である「人」もまた「自己組織系」であると考えられる。よって、「人」そのものによって形成される「自己管理空間」は「自己組織系」であると考ええる。

「自己組織系」をイメージ化したものの一つに「リゾーム (rhizome)」がある。「リゾーム」は、本来仏語で「根茎」の意味を持つ語彙であるが、ドゥルーズ (Gilles Deleuze) とガタリ (Felix Guattari) によって「自己組織系」のイメージの原型となるような意味が付加された。“Rhizome Communications” という非営利団体のホームページ (<http://www.rhizome.or.g/info/>) において、次のように説明されている。(下に上記ホームページに掲載されている根茎の絵を図6として引用する。)

A rhizome is a horizontal, root-like stem that extends underground and sends out shoot to the surface. Rhizomes connect plants in a living network. Rhizome is also a figurative term used by Gilles Deleuze and Felix Guattari to describe non-hierarchical networks of all kinds.

説明文の最後の部分には、“non-hierarchical networks of all kinds” とあり、「リゾーム」が、階層的でないネットワーク、つまりタテ型ネットワークではない、ネットワークであることが示されている。

また、『電子ブック版・データパル 総合版 91-96』<sup>29)</sup>には、「規則や順序にしばられない横断的な展開、あるいはより自由でランダムな運動や思考をさす。」とある。さらに、今田によれば、

リゾームとは、いわばネットワークに絡みついて、その関節はずしをするような運動体である。(中略) 地図のようにどこからでも進入でき、どこからでも脱出できる。(中略) それは、ハイアラーキー構造を持たず、またセンターもなく、諸要素が複雑にもつれあった相互作用をしている混沌系である。<sup>30)</sup>

と考えられている。

今田は「リゾーム」と「ネットワーク」を区別して考えているが、ネットワークをタテ型ネットワーク及びヨコ型ネットワークに置き換えて見直せば、「リゾーム」を「タテ型」「ヨコ型」に働きかけて変化させる機能を持つネットワークと考えられる。ここでは、「リゾーム型ネットワーク」(以下「リゾーム型」とする。)と呼ぶことにする。

ここで「個人空間モデル」に立ち戻り、「リゾーム型」について考えることにする。「自己管

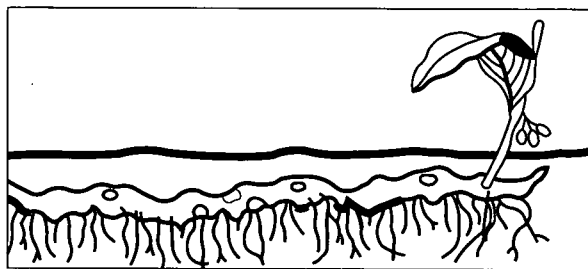


図6 リゾーム (根茎)

理空間」が「人そのものの空間」であり、「他者管理空間」及び「自律共生空間」が、その「人」がかかわるネットワーク〔タテ型〕及び〔ヨコ型〕によって形成されているため、「他者管理空間」または「自律共生空間」における「人」のアクション（行動）は、ネットワークに働きかけ、それを変化させるものであると考えられる。ネットワークの中で行動する「人」のイメージは、今田の「いわばネットワークに絡みついて、その関節はずしをするような運動体」のイメージに近い。よって、「人そのものの空間」である「自己管理空間」を形成するネットワークを〔リゾーム型〕と考えることにする。

第2章で述べたように、「他者管理空間」の中に生まれた「人」は、インターアクションを通じて「自律共生空間」を形成し、やがて「自我」の芽生えとともに「自己管理空間」を形成する。こうした三つの「空間」によって構成される「個人空間」の中で、〔リゾーム型〕は「自己管理空間」を形成するとともに、「他者管理空間」及び「自律共生空間」の中に入って行動することによって、各々のネットワークを変化させる働きを持つネットワークであると考えられる。分かりやすく言えば、「人」が行動するとき〔リゾーム型〕は「自己管理空間」から出て「他者管理空間」または「自律共生空間」の中に入っていき、そこで〔タテ型〕または〔ヨコ型〕とインターアクションしてネットワークを変化させる、ということである。ただし、前述のとおり〔リゾーム型〕は、〔タテ型〕ではないため、〔ヨコ型〕を〔タテ型〕に変化させるとは考えられない。よって〔タテ型〕から〔ヨコ型〕、あるいは〔ヨコ型〕から〔ヨコ型〕（構成、関係等の変更）に変化させると考えられる。ネットワークが変化した場合、「個人空間」の構成が変化する。特に〔タテ型〕から〔ヨコ型〕への変化の場合、「他者管理空間」が減少し「自律共生空間」が増大する。

なお、「自己組織系」が有する性質は、「自己組織性 (self-organicity)」と呼ばれている。「自己組織性」とは、今田によれば「システムが環境と相互作用を営みつつ、みずからの手でみずからの構造をつくり変えていく性質を総称する概念」<sup>31)</sup>である。

以上述べた〔リゾーム型〕の特徴をまとめると次のようになる。

（リゾーム型ネットワークの特徴）

形態：自己組織系

関係：自己組織性

### 3. 3. 2 リゾーム型ネットワークの中身

金子郁容は『ボランティア もう一つの情報社会』の中で「ボランティアとはどんな人か？」という問いに対して、次のように答えている。

ボランティアとは、その状況を「他人の問題」として自分から切り離れたものとみなさず、自分も困難を抱えるひとりとしてその人に結びついているという「かかわり方」をし、その状況を改善すべく、働きかけ、「つながり」をつけようと行動する人である。<sup>32)</sup>

これは「自律共生空間」を形成する〔ヨコ型〕の発想であろう。ただし、そこで「働きかけ、『つながり』をつけよう」として動き出すものは、「自己管理空間」から出てくる〔リゾーム型〕であると考えられる。すなわち、「人」のアクションが〔リゾーム型〕と他者のネットワーク（他者の個人空間）とのインターアクションを生み、そこに「つながり」すなわち〔ヨコ型〕が形成されると考えられる。

「人」のアクションがすべて〔リゾーム型〕と結び付くかと言えば、そうではない。「人」が

「他者管理空間」または「自律共生空間」の中で行う、ルーチンとなった無意識的なアクション、他者の指示による追従的なアクションなどが、個人空間を構成する既存のネットワークに変化をもたらすことは、あまり考えられない。よって、これらのアクションは、[リゾーム型]とは関係のないものであると考えられる。この場合のアクションとは、各ネットワークに変化を与えることなく行われる、言わば、ネットワーク付随型のアクションであると解釈される。[リゾーム型]は「自己組織系」であるため、アクション自体もその特徴を備えたものであることが考えられる。今田は、自己組織性の本質について次のように述べている。

自己組織性の本質は、自己が自己のメカニズムに依拠して自己を変化させることにある。

(中略)自分で自分を変えるという営みは環境適応的ではない。外から誰かに注意されたり、問題を指摘されたりして、これに応える形で自分を変えるようでは自己組織的ではない。外圧に弱い日本は環境適応的であっても、自己組織的ではない。自分の中に変化の兆しを読み取り、それを媒介にして新しい構造なり、秩序なりを立ちあげてはじめて自己組織的である。<sup>33)</sup>

自己組織性を持つ[リゾーム型]にかかわるアクションとは、「新しい構造なり、秩序なりを立ちあげ」るようなものであることが指摘されている。これは、[リゾーム型]におけるアクションを「ネットワークに変化を与えるもの」に限定することの根拠となりうる。

最後に、[リゾーム型]に何らかの方向性を与えるものについて、示唆的なロジャーズのコメントを『人間尊重の心理学』から引用する。

生命体はたえず探求し、何かを始め、何かに到達しようとしているのです。(中略)簡単に言うと、生命体の維持だけではなく、その向上を含むような実現、充足への志向であります。<sup>34)</sup> [リゾーム型]という「自己組織系」を一つの生命体としてとらえれば、それは自己実現、自己充足に向って「個人空間」を作り変えていこうとするものであると考えられる。

#### 4 ま と め

これまでの考察から得られた「個人空間におけるネットワーク」についての「イメージ」、あるいは「モデル」をまとめると次頁の図7のようになる。

図1の「個人空間モデル」と異なる点は、他の空間への出入りを行うための「出入口」が「自己管理空間」に存在するという点である。また、[リゾーム型]は、他の空間を「アクション」によって変革することができる。それによって、「個人空間」全体の構成の変更に可能となる。次に、3種類のネットワークの特徴(形態、関係)について表1に示す。

明確になったのは、「自己変革性」を有するのは[リゾーム型]のみである、という点である。[タテ型][ヨコ型]は、[リゾーム型]の「アクション」によって、初めて「変革」が可能となる。

蛇足的ではあるが、3種類のネットワークの関係を比喩的な描写を借りて表してみる。まず、[リゾーム型]を周囲が農地で囲まれた一軒屋(自己管理空間)に一人で住む「農夫」と考え、次に、[ヨコ型]を「農夫」が耕している「田畑」、世間話などする近所の「農家」、お気に入りの「散歩道」などとし、続いて、「タテ型」を「農夫」が土地を借りている「地主」、借金をしている「農協」、農作物に被害を受ける「台風」などと考えてみれば理解しやすいかもしれない。

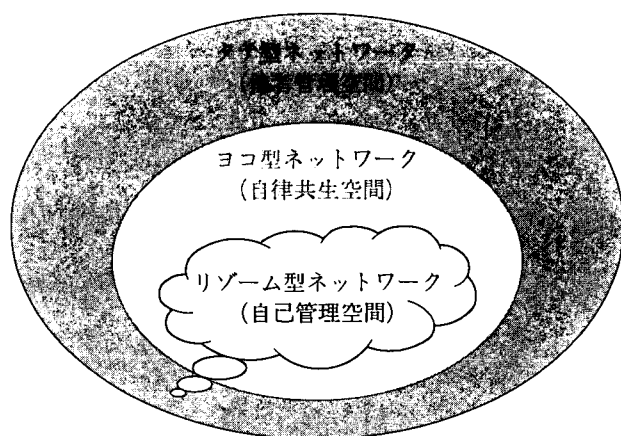


図7 個人空間におけるネットワーク・モデル

表1 個人空間における3種類のネットワークの特徴

タイプ	形態	関係
タテ型ネットワーク	階層構造	上下, 一方向的, 固定的, 強制的, 閉鎖的
ヨコ型ネットワーク	水平構造	対等, 双方向的, 流動的, 自律的, 開放的
リゾーム型ネットワーク	自己組織系	自己組織性

最後に、今後の課題について述べる。今回提示した「個人空間のネットワーク・モデル」については、検証が質量ともに不十分である。よって、検証を継続するとともに、モデルに改善を加えていきたい。また、そのモデルを元にして、個人の習得 (acquisition) とネットワークの関係について考察していきたい。なお、その際できれば、J.V. ネウストプニー (J.V. Neustupny) <sup>35)</sup> の「習得モデル (3種類の監督による習得)」との関連付けを行いたい。

※謝辞：4年半以上続くお付き合いの中で、たくさんの「学び」をいただいた「ネットワーク調査研究委員会」の皆さんに心から感謝申し上げます。

## 註

- 1) 葉養正明他編 (1998) 『教育キーワード137』時事通信社 pp.252-253
- 2) 完全な「他者管理空間」は存在しえないと考えられる。なぜなら、それを受け取る側、すなわち「自己」によって何らかの反応があり得るからである。ただし、ここでは主観的なレベルにおいて、固定的で一方向的な関係を強いられている、と感じるものを「他者管理」とし、それが存在する空間を「他者管理空間」とした。
- 3) 木田元他編 (1997) 『コンサイス20世紀思想事典』三省堂 (p.393) に「人と人との間、人と環境・道具との間の、自律的で創造的なかわりあいを意味し、人と人が相互に依拠しあうなかで他者の自由を脅かさない個人の自由が保障される。」とある。

- 4) 萩原は「相互的な関係性」としているが、意味を明確にするため「相互的な関係」とした。また、これを他者管理の「一方的な関係」と対比的な意味で使用している。
- 5) 「『他者』との『相互的な関係』がほとんどなくてもよい」と、ここで「ほとんど」を加えたのは、完全に自己完結的な空間の想定が困難であるためである。人が生きている限り、「他者」との関係を完全に排除することは不可能であろう。
- 6) 「非管理空間」は、子どもとの何らかの関係が生じる(子どもの世界が広がる)ことによって「他者管理空間」または「自律共生空間」に変化すると考えられる。
- 7) 廣松渉他編(1998)『岩波哲学・思想事典』岩波書店では「相互行為」と訳され「人間の行為としての interaction は、複数の個人が互いに非機械的に働きかけ合う社会的行為のことであり、生産、製作などのように自然物を対象とする行為と対をなす。」とある。
- 8) 見田宗介他編(1994)『社会学事典』弘文堂の「自我」の項目に「自分自身のこと、特に他の人間とは区別された人間のあり方を指す。それはまた人間の個性や独自性を表わし、創造性や主体性を産み出すものと考えられる。」とある。
- 9) S.A. マレル(1977)『コミュニティ心理学』新曜社 p.78
- 10) S.A. マレル(1977)『コミュニティ心理学』新曜社 pp.79-81
- 11) G.H. ミード(1973)『精神・自我・社会』青木書店 p.146
- 12) S.A. マレル(1977)『コミュニティ心理学』新曜社 p.81
- 13) 船津衛(1983)『自我の社会理論』恒星社厚生閣 p.2
- 14) 葉養正明他編(1998)『教育キーワード137』時事通信社 pp.250-251
- 15) 中根千枝(1967)『タテ社会の人間関係』講談社
- 16) 逢沢明(1997)『ネットワーク思考のすすめ』PHP 研究所 pp.40-41
- 17) 逢沢明(1997)『ネットワーク思考のすすめ』PHP 研究所 p.41
- 18) 佐伯胖他編(1996)『学び合う共同体』東京大学出版会 pp.44-45
- 19) 藤田英明(1997)『教育改革』岩波書店 p.208
- 20) 浜口恵俊編(1980)『集団主義』至文堂 p.162
- 21) 逢沢明(1997)『ネットワーク思考のすすめ』PHP 研究所 p.41
- 22) イヴァン・イリイチ(1977)『脱学校の社会』東京創元社 p.2
- 23) イヴァン・イリイチ(1977)『脱学校の社会』東京創元社 p.142
- 24) 古瀬幸広・廣瀬克哉(1996)『インターネットが変える世界』岩波新書
- 25) 高橋勝(1992)『子どもの自己形成空間』川島書店 pp.141-143
- 26) 見田宗介他編(1994)『社会学事典』弘文堂 p.351
- 27) カール・ロジャーズ『人間尊重の心理学』創元社 p.109
- 28) 見田宗介他編(1994)『社会学事典』弘文堂 p.358
- 29) 小学館編(1996)『電子ブック版・データパル 総合版 91-96』小学館
- 30) 今田高俊(1994)『混沌の力』講談社 p.200
- 31) 今田高俊(1987)『モダンの脱構築』中公新書 p.55
- 32) 金子郁容(1992)『ボランティア もう一つの情報社会』岩波書店 p.65
- 33) 今田高俊(1994)『混沌の力』講談社 p.104
- 34) カール・ロジャーズ『人間尊重の心理学』創元社 p.117
- 35) 千葉大学教授、筆者が委員として参加している「ネットワーク調査研究委員会」委員長

## A STUDY OF NETWORKS IN PERSONAL SPACE

Koji TAJIMA\*

### ABSTRACT

In this paper I got my ideas about networks in shape by making use of my experience of researching networks, in teaching Japanese as a foreign language. First of all, I analyzed a personal space and presented three kinds of spaces that compose personal space. Next, I showed network models corresponding to each space, and finally, I oriented the research for the future.

---

\* Division of Languages: Department of Japanese Language